

在日外国人の高齢者支援に関する質問紙調査報告

大橋充人*¹・木下貴雄*²・神田すみれ*³・山本理絵*⁴

1. 研究目的

日本に住む外国人の定住化・永住化が進む中、日本で老後を迎え、日本で一生を終える人たちが増えている。1990年の入管法改正以来、愛知県を中心とする東海地域では、外国人労働者が急増し、それに伴い、親に連れられてくる子どもたちの教育が喫緊の課題となっていた。こうした課題は、いまだ解決されていないものの、多くの研究が進み、不十分ながら、行政の取組やサポートもなされてきている。しかし、看護・介護・ターミナルケア等、高齢化に伴う外国人へのサポートについては、ほとんどなされておらず、また、外国人の高齢化の問題についても、ようやく一部の間で認識されるようになってきたところである¹⁾。

在日外国人の高齢化は、まだ目立っていないが、急速に進んでいる。例えば、愛知県で突出して多いブラジル人の場合、在留外国人統計によれば、60歳以上の割合が、2011年末には5%であったものが2021年末には11%と倍増しており、この間、ほぼ線形に伸びており、人口構成から、この勢いは、しばらく止まりそうにない。外国人高齢者は、今後も伸び続け、社会的問題に発展すると推測されるが、問題が顕在化するまでには多少の時間的余裕がある。そこで、今のうちから研究を進め、外国人の目線に立った対応を検討することにより、将来生じることが予測される外国人の高齢化問題に備えていきたいと考えている。

日本に在住する外国人高齢者は、今後増加していくことが予想されるが、外国人にとって、日本の高齢者支援や介護サービスは、利用しやすいものになっているとは言えないと思われる。そこで、外国人当事者に対して、アンケート調査を行うことにより、外国人高

齢者の介護や看護における困難・不安・要望・ニーズ・課題を明らかにする一歩としたい。なお、ここでの「外国人」には、外国籍の人のみではなく、日本国籍を有していながら外国につながる背景をもつ人も含んでいる。このような外国にルーツのある人も、外国籍の人と同様の課題を抱えている場合があるからである。

本研究は、「多様化社会における教育と社会福祉の連携による生涯発達支援に関する総合的研究」の一部である。研究全体としては、国籍・民族的アイデンティティ、障害、経済的貧困、性的マイノリティ等、多様性を受け入れる社会の中で、一生涯を通じた発達支援において教育と社会福祉がいかに連携していけばよいか、その効果的な支援方法及び支援システムを明らかにすることを目的としている。

本調査結果をもとに今後は、日本人高齢者の場合との比較も行いながら、外国人高齢者支援につながる、教育と福祉の連携の課題と必要な視点や実践モデルを、分野横断的視点から明らかにしていく予定である。

2. 在日外国人の高齢者支援に関する研究の動向

外国人の高齢化は日本社会が初めて経験することであるが、その先駆けとなったのは戦前から日本に住んでいるオールドカマーの在日コリアンである²⁾。そのため、外国人高齢者に関する先行研究では、在日コリアンに関する文献が多数を占めている。

庄谷・中山(1997)は、在日コリアンにおける高齢化や高齢者の独居、無年金による生活の貧困を指摘した。金(2017)は、在日コリアン認知症高齢者への適切なケアにおいて、生活背景に配慮し、民族性を個性

として尊重するケアが重要であることを指摘した。李・西内・高橋 (2017) は、在日コリアン高齢者の在宅ケアを行っている看護・介護者へのインタビュー結果として、要介護の在日コリアン高齢者の特徴とケアワーカーがケアを提供する上での困難感を示した。

一方、同じオールドカマーである老華僑に関する先行研究は少なく、鐘 (2007) 「在日華僑華人と異国の老後」、何 (2010) 「在日華僑・華人の老後—横浜中華街を事例に一」、鐘 (2017) 「在日華僑華人の現代社会学 越境者たちのライフヒストリー」のみである。

インドシナ難民に関しては、在日ベトナム人で介護者でもあるハ (2005) は、在日ベトナム高齢者について、生活保護を受けている人が多く、言葉の壁などによって病気の発見が遅れたり、介護保険制度にアクセスできずに介護サービスを利用できない問題があることを指摘している。名和田 (2015) は、中国帰国者の介護に関して、帰国者が社会的に不利な状況にあることを顕在化させ、制度の改革を進める必要があり、帰国者に介護保険の適確な情報提供と、支援者が福祉専門職に帰国者に関する情報提供を心がける必要があることを指摘した。また、中国帰国者二世である王 (2019) は、帰国者の介護において「五つの壁」(コミュニケーション・識字・味覚・習慣・心) があり、介護保険制度の周知と行政や福祉機関、介護施設への理解啓発が必要と指摘している。

国際結婚によって来日した農村のアジア人花嫁について、李 (2015) は、高齢の夫や舅姑の介護を担っている彼女たちがケアされる立場になった時、日本社会は彼女らを十分に包摂できるだろうか、それとも「使い捨て」にするのだろうかと問いかけている。

日系南米人については、サンパウロ新聞社編集局長の鈴木 (2008) が、出稼ぎから定住への変化によって高齢化問題が表面化し、老後への支援が必要になっていることを、日系人労働者派遣会社代表者の林 (2014) は、日系ブラジル人の末期がんや認知症、幻覚症状、孤独死を例に挙げて、日系社会の高齢化は喫緊の問題であると指摘した。また、寶田・柿木・木村 (2015) は、日系ブラジル人の日本での生活状況に関する先行調査の分析から、定住化に伴う障がい者への対応が重要であることを指摘した。アルゼンチン日系二世のアルベルト松本 (2021) は、老後のことについて現時点でそれほど危機感を持っていないが、老後の道筋を考える必要があり、まずは、介護予防教室等に通って、少しでも健康的かつ楽しい老後を過ごしてもらえよ

うに努めてはどうかと指摘している。

高畑 (2020) は、在日フィリピン女性は、非正規雇用が多く、母子世帯や高齢になることによって困窮になった時には生活保護に頼らざるを得ないため、予防策として職業訓練やキャリアアップの拡充が必要であると指摘している。大橋 (2021) は、在日ムスリムに対するヒアリングの中で葬式・埋葬についても聞いており、非ムスリムの家族や親族との間での考え方のちがいがいへのとまどいを指摘している。

沖縄在住の外国人について、松本 (2016) は、沖縄在住の米国人・イスラエル人・インド人・フィリピン人・台湾出身者における介護サービス利用に関するヒアリング調査から、当事者視点での介護サービスの再構築を行うとともに、文化を共有するコミュニティを活用しながら、異文化を理解する機運を醸成することが必要であると指摘し、ケアワーカーを支援し、外国人の信仰に支えられた現生と世界観を尊重することが重要であることを示唆した。

在日外国人高齢者への介護支援については、王・渋谷 (2018) において、外国人高齢者の介護の実態調査や多言語介護通訳者の養成、異文化介護人材の育成、異文化介護ネットワークの形成が必要であると指摘している。また、牧田 (2020) は、多文化背景を持つ高齢者の支援には、個々のニーズにあった言語と文化を尊重したケア提供とそれができる地域のケア資源が必要であり、事前にケアサービス施設や地域包括支援センターが地域に住む多文化の背景を持つ高齢者の存在を把握し、支援の方法を検討する必要があると指摘している。

以上のとおり、ニューカマー高齢者に関する先行研究は、ここ数年、ようやく関心が高まってきたばかりであり、スタートラインに立ったに過ぎず、外国人高齢者に関する実態調査もほとんどない。そこで、本研究においては、外国人高齢者に対する支援につなげるため、まずは、アンケート調査により、高齢化が進んでいる中国帰国者を中心とする中国系や高齢化が進むと予想される日系南米人、フィリピン人を対象に、老後生活や介護に関して実態把握を行うこととした。

3. 研究方法

(1) 調査対象者

中国、ブラジル、ペルー・ボリビア、フィリピン出身の50歳代以上の日本に在住する外国人³⁾。

(2) 調査方法

外国人コミュニティ団体10か所の責任者に、調査の説明をして協力を依頼し、当事者である外国人高齢者150件分のアンケート用紙一式を預け、該当者に渡してもらった。アンケート用紙は、無記名とし、各回答者から返信用封筒による郵送にて回収した。

調査の内容は、フェイスシート、来日の経緯、現在の健康・生活状況、老後の予定・不安、介護・保険制度の認知、利用している介護サービス、老後の介護に関する要望、終末期ケア・看取りに対する望みなどである。調査期間は、2021年12月から2022年6月までである。

(3) 倫理的配慮

本研究の実施・発表にあたっては、愛知県立大学研究倫理審査委員会の許可を得ている（研究課題名「多様化社会における教育と社会福祉の連携による生涯発達支援に関する総合的研究—外国人高齢者支援に関する教育と社会福祉の連携に関する調査—」）。研究協力者（団体の責任者）には、研究目的・方法、協力への自由意思の尊重、プライバシーの保護等について、協力説明・依頼書を用いて説明を行い、承諾を得た。調査対象者にも同様の説明・依頼文をアンケートに添えて、回答の返送をもって同意を確認した。

また、アンケート用紙は、日本語版と外国語版の両方を用意し、読み書きしやすいほうを選んで回答してもらった。

4. 調査結果

(1) 属性

回答者は65名であり、出身地は、「中国」が25名、

「ブラジル」が20名、「ペルー・ボリビア」（スペイン語圏）が12名、「フィリピン」が3名、「その他」が5名であった。「その他」の内訳は、日本（中国系）2名、日本（ブラジル系）1名、ベネズエラ1名であった（表1）。

年齢構成を見ると、50～54歳が20名、55～59歳が20名と50歳代が多くなっており、60歳以上は24名（うち、2名は85～89歳）となっている（表2）。

同居している家族は、「子ども」が最も多く55名、次いで、「配偶者」が38名、「孫」が29名、「兄弟」が17名となっている。「その他」は8名いるが、そのうちの2名は一人暮らしと記載している。それ以外にも一人暮らしの人がいる可能性はあるが、ほとんどは家族と一緒に暮らしていると言える（表3）。最も多い組み合わせは、「配偶者・子ども」で11名、次いで「配偶者・子ども・孫」「子どものみ」が9名、「配偶者・子ども・孫・兄弟」が8名となっている（表4）。一緒に暮らしている子どもの人数の平均は、2.1人、孫は2.7人、兄弟は2.6人であった。

滞在年数は、最も多いのは26～30年で21名、次いで31～35年が14名、16～20年が9名となっている（表5）。平均滞在年数は25年である。

来日年齢は、最も多いのは26～30歳で16名、次いで21～25歳が13名、36歳～40歳が9名となっている（表6）。平均来日年齢は34歳である。

来日理由は、「仕事」が31名で最も多いが、ほかには、「結婚」が10名、「呼び寄せ」が9名、「留学」が4名、「その他」が15名となっている（表7）。

在留資格⁴⁾は、「永住者」が最も多く、29名となっており、次いで「その他」が15名、「定住者」が11名

表1 性別

	男性	女性	回答しない	合計
中国	14	11	0	25
ブラジル	6	13	1	20
ペルー・ボリビア	5	7	0	12
フィリピン	0	3	0	3
その他	1	4	0	5
合計	26	38	1	65

表2 年齢

	50～54歳	55～59歳	60～64歳	66～69歳	70～74歳	75～79歳	80～84歳	85～89歳	合計
中国	9	6	1	3	3	1	1	1	25
ブラジル	7	9	2	0	0	1	1	0	20
ペルー・ボリビア	3	3	2	2	1	0	0	0	11
フィリピン	1	1	0	1	0	0	0	0	3
その他	0	1	0	1	1	1	0	1	5
合計	20	20	5	7	5	3	2	2	64

表3 同居家族（複数回答）

	父	母	配偶者	子ども	孫	兄弟	その他	合計
中国	1	2	15	22	11	5	4	25
ブラジル	2	0	9	15	6	4	3	20
ペルー・ボリビア	2	1	9	11	8	5	0	12
フィリピン	0	0	1	2	1	2	1	3
その他	1	1	4	5	3	1	0	5
合計	6	4	38	55	29	17	8	65

表4 家族構成

	父、母、配、子、孫	父、母、兄弟	父、配、子、兄弟	父、配、子	父、兄、弟	母、配、子、孫	配、子、孫、兄弟	配、子、孫	配、子、他	配、子、兄弟	配、子	配、兄弟	配	子、孫、他	子、孫、兄弟	子、孫	子、兄弟	子	他	合計
中国	1	0	0	0	0	1	2	3	1	1	5	0	1	1	2	1	0	4	2	25
ブラジル	0	0	0	1	1	0	1	2	0	0	3	1	1	1	0	2	1	4	2	20
ペルー・ボリビア	0	1	1	0	0	0	3	3	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	12
フィリピン	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	3
その他	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	5
合計	2	1	1	1	1	1	8	9	1	1	11	1	2	2	2	5	2	9	5	65

※「配」は配偶者

表5 滞在年数

	～5年	6～10年	11～15年	16～20年	21～25年	26～30年	31～35年	36～40年	合計
中国	1	1	5	4	2	3	6	2	24
ブラジル	0	2	0	3	0	10	4	0	19
ペルー・ボリビア	0	0	0	2	3	5	2	0	12
フィリピン	0	0	0	0	1	1	1	0	3
その他	0	0	0	0	1	2	1	1	5
合計	1	3	5	9	7	21	14	3	63

表6 来日年齢

	16～20歳	21～25歳	26～30歳	31～35歳	36～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61～65歳	合計
中国	4	2	3	2	4	1	2	1	3	2	24
ブラジル	2	7	6	0	2	1	1	0	1	0	20
ペルー・ボリビア	0	3	6	0	2	0	0	1	0	0	12
フィリピン	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	3
その他	0	0	1	0	1	2	1	0	0	0	5
合計	6	13	16	3	9	4	5	2	4	2	64

表7 来日理由（複数回答）

	留学	仕事	結婚	呼び寄せ	その他	合計
中国	2	4	4	6	10	24
ブラジル	2	16	2	2	0	20
ペルー・ボリビア	0	8	1	1	2	12
フィリピン	0	1	3	0	0	3
その他	0	2	0	0	3	5
合計	4	31	10	9	15	64

表8 在留資格

	永住者	定住者	日本人の配偶者等	家族滞在	技能	技術・人文知識・国際業務	その他	合計
中国	6	2	1	3	3	1	9	25
ブラジル	13	4	0	0	0	0	3	20
ペルー・ボリビア	6	5	1	0	0	0	0	12
フィリピン	2	0	1	0	0	0	0	3
その他	2	0	0	0	0	0	3	5
合計	29	11	3	3	3	1	15	65

表9 家庭内使用言語（複数回答）

	日本語	中国語	ポルトガル語	スペイン語	フィリピン語	英語	合計
中国	11	21	0	0	0	0	25
ブラジル	10	0	14	0	0	1	20
ペルー・ボリビア	5	0	0	11	0	0	12
フィリピン	2	0	0	0	3	2	3
その他	2	1	2	2	0	0	5
合計	30	22	16	13	3	3	65

表10 日本語会話

	できる	まあまあ	あまりできない	できない	合計
中国	10	5	9	1	25
ブラジル	12	7	1	0	20
ペルー・ボリビア	3	3	6	0	12
フィリピン	2	1	0	0	3
その他	1	3	0	1	5
合計	28	19	16	2	65

表11 日本語読み書き

	できる	まあまあ	あまりできない	できない	合計
中国	9	5	8	3	25
ブラジル	6	8	4	2	20
ペルー・ボリビア	3	0	6	3	12
フィリピン	1	2	0	0	3
その他	1	3	0	1	5
合計	20	18	18	9	65

表12 就労形態

	正社員	契約社員	派遣社員	パートタイマー	個人事業主	自営業	働いていない	その他	合計
中国	10	0	0	2	5	0	5	3	25
ブラジル	3	3	5	3	2	1	2	0	19
ペルー・ボリビア	0	3	5	1	0	0	2	0	11
フィリピン	1	0	0	0	0	1	1	0	3
その他	0	0	1	1	0	0	3	0	5
合計	14	6	11	7	7	2	13	3	63

となっている。「その他」には帰化も含まれる（表8）。

家庭内使用言語は、母語を使用している場合が多少多くなっているが、日本語も使われている。また、日本語での会話は7割程度ができ、読み書きも6割程度ができる（表9、表10、表11）。

就労形態は正社員が14名と最も多く、次いで派遣社員が11名となっている。ただし、国籍によって形態に差が見られ、中国は正社員、ブラジルやペルー・ボリビアは派遣社員や契約社員が多くなっている。働いていない人も13名いる（表12）。

以上のことから、回答者の属性としては、おおむね20～30歳代に来日し、20～30年程度日本に暮らし、「永住者」等の安定した在留資格を持ち、日本語もある程度でき、就労形態に差はあっても働いている人が多いことがわかる。年代としては50歳代が多かったが、60歳代以上の人たちからも回答が得られた。独居老人が社会問題として取り上げられることがあるが、本調査の回答者は、家族と暮らしている人がほとんどであった。

(2) 現状

健康保険及び年金の加入状況について聞いたところ、65名中、健康保険には60名が、年金には50名が加入している⁵⁾と回答している（表13、表14）。年金に加入していない9名のうち、8名は60歳以上であった。

健康状態は、「健康」が29名、「まあまあ健康」が28名となっており、多くが健康な状態にあると言え、「現在治療中、または後遺症のある病気」のない人は43名となっている（表15、表16）。

今の楽しみは、「家族団らん」が30名と最も多く、次いで「仕事」と「趣味・レジャー」が同数で28名、「友人と交流」「健康づくり」も同数で21名となっている（表17）。

家族以外で「親しい日本人も同国人もいる」という人は32名と最も多く、次いで「親しい同国人がいる」人が16名となっている。「挨拶する同国人しかいない」や「家族以外のつきあいはない」という人は、それぞれ2名となっている（表18）。

老いを感じることは、「よくある」が11名、「時々ある」が20名となっており、半分程度が老いを感じている。年齢別に見ると、66～69歳及び80歳以上は全員が老いを感じているものの、75～79歳は全員が、70～74歳は5名中3名が老いを感じていない。回答

表13 健康保険

	加入している	加入していない	よくわからない	合計
中国	24	1	0	25
ブラジル	18	1	1	20
ペルー・ボリビア	11	1	0	12
フィリピン	2	0	1	3
その他	5	0	0	5
合計	60	3	2	65

表14 年金

	加入している	加入していない	よくわからない	合計
中国	21	3	0	24
ブラジル	17	2	1	20
ペルー・ボリビア	6	3	1	10
フィリピン	2	0	1	3
その他	4	1	0	5
合計	50	9	3	62

表15 健康状態

	健康	まあまあ健康	あまり健康ではない	健康ではない	合計
中国	11	11	2	1	25
ブラジル	12	8	0	0	20
ペルー・ボリビア	4	7	1	0	12
フィリピン	1	1	1	0	3
その他	1	1	3	0	5
合計	29	28	7	1	65

表16 治療中、または後遺症のある病気

	ある	ない	合計
中国	6	19	25
ブラジル	7	12	19
ペルー・ボリビア	2	10	12
フィリピン	2	1	3
その他	4	1	5
合計	21	43	64

表17 今の楽しみ（複数回答）

	仕事	ボランティア	家族団らん	趣味・レジャー	一人のんびり	友人と交流	健康づくり	わからない	その他	合計
中国	12	7	10	10	5	8	9	1	3	25
ブラジル	10	4	10	12	3	7	7	1	3	20
ペルー・ボリビア	4	2	7	3	3	5	2	0	0	12
フィリピン	0	2	2	0	1	0	0	0	0	3
その他	2	0	1	3	1	1	3	0	2	5
合計	28	15	30	28	13	21	21	2	8	65

表18 近所づきあい

	親しい日本人も同居人もいる	親しい同国人がいる	挨拶する日本人・同国人がいる	挨拶する同国人しかない	家族以外のつきあいはない	その他	合計
中国	15	5	4	1	0	0	25
ブラジル	9	7	2	0	1	1	20
ペルー・ボリビア	5	2	3	1	1	0	12
フィリピン	2	1	0	0	0	0	3
その他	1	1	2	0	0	1	5
合計	32	16	11	2	2	2	65

表19 老いを感じること

	よくある	時々ある	あまりない	全くない	合計
中国	6	7	9	3	25
ブラジル	3	5	6	6	20
ペルー・ボリビア	2	4	2	3	11
フィリピン	0	3	0	0	3
その他	0	1	2	0	3
合計	11	20	19	12	62

表20 老いを感じること (年齢別)

	よくある	時々ある	あまりない	全くない	合計
50～54歳	2	9	6	3	20
55～59歳	2	5	7	5	19
60～64歳	1	1	1	2	5
66～69歳	4	1	0	0	5
70～74歳	0	2	2	1	5
75～79歳	0	0	2	1	3
80～84歳	1	1	0	0	2
85～89歳	1	1	0	0	2
合計	11	20	18	12	61

表21 老いを感じる時 (複数回答)

	病気がちになってきた	物忘れが多くなった	同じことを繰り返す	外出が少なくなった	その他	合計
中国	4	6	2	5	3	13
ブラジル	1	3	4	2	3	9
ペルー・ボリビア	2	4	2	3	1	8
フィリピン	1	2	0	0	0	3
その他	2	2	0	0	1	4
合計	10	17	8	10	8	37

表22 年をとるにつれてどのようなことを感じるか (複数回答)

	日本語を使うのが億劫	母国食へのこだわり	親が気になる	故郷への思い	その他	特にない	合計
中国	0	4	6	3	1	12	22
ブラジル	1	1	2	3	2	9	16
ペルー・ボリビア	1	1	2	3	1	5	12
フィリピン	0	0	0	0	0	3	3
その他	0	1	0	2	0	2	4
合計	2	7	10	11	4	31	57

数が少ないため、単純な比較はできないが、年齢が高くなるにつれて老いを感じるようになるとは言えない(表19、表20)。老いを感じる時は、「物忘れが多くなった」が17名、「病気がちになってきた」「外出が少なくなった」が10名、「同じことを繰り返す」が8名となっている(表21)。

年齢を重ねるにつれ、どのようなことを感じるか聞いてみたところ、「故郷への思い」が強くなった人は11名、「母国食へのこだわり」が強くなった人は7名、「親が気になる」人は10名(10人とも60歳未満)となっており、気持ちに変化があった人は比較的少なく、「特にない」という人が31名と半数程度を占めている(表22)。

以上のことから、現状としては、健康保険や年金に加入しており、健康で病気もない人が多い。また、家族や友人と一緒にいたり、仕事や趣味に打ち込んでいる様子がかがわれ、社会との接点を持っている人が多い。徐々に老いや故郷への思いなどが強くなってき

ている人もいるが、半数程度は特に感じていないことがわかった。

(3) 将来

老後はどこで過ごすか聞いたところ、「日本」が37名、「まだ考えていない」が18名、「母国」が9名となっており、帰国を考えている人は少ない(表23)。その理由としては、「家族・親族がいる」が36名と最も多く、次いで「医療・介護システムが優れている」が20名となっている。母国に帰る人について見ると、全員が「家族・親族がいる」を理由の一つとして挙げている一方で、「医療・介護システムが優れている」は誰も挙げていない(表24、表25)。

今後どのようなことを楽しみたいかを聞いたところ、「趣味・レジャー」が36名と最も多く、次いで「健康づくり」が29名、「家族団らん」が26名となっている(表26)。これを今の楽しみと比較すると、「趣味・レジャー」「健康づくり」が8名増えているのに対し、「仕事に打ち込む」が8名減り、「一人でのんび

り」も6名減っている(表27)。

老後に向けての準備をしようと「考えている」という人は36名、すでに「している」人は19名となっており、「していない」人は9名だけとなっている(表28)。

今後のライフプラン(老後の生活設計)をつくりたいか聞いたところ、「つくりたい」という人は23名いるのに対し、「つくりたくない」人は5名であった。また、「つくり始めている」人やすでに「つくってある」人もおり、それぞれ8名ずつとなっている。その一方で、「わからない」は10名、「判断できない」は8名となっている(表29)。

日本で老後を迎えるにあたっての心配・不安について聞いたところ、「経済的不安」が23名と最も多く、

次いで「健康の不安」が17名となっている。「特になし」人も15名いるが、他の49名は何らかの心配・不安を抱えている(表30)。

以上のことから、日本で老後を過ごそうとしている人が多く、その理由として、日本に家族・親族がいるほかに、医療・介護システムが優れていることを挙げている人が多い。老後は、趣味や健康づくり、家族団らんなどを求めている人が多い一方で、老後への備えをしておきたいという人が多く、経済的不安を抱えている人も多いことから、ファイナンシャルプランも含めたライフプランを作成するための支援も必要になってくると思われる。

表23 老後はどこで過ごすか

	母国	日本	まだ考えていない	合計
中国	2	17	6	25
ブラジル	3	11	5	19
ペルー・ボリビア	2	5	5	12
フィリピン	1	1	1	3
その他	1	3	1	5
合計	9	37	18	64

表24 表23の理由(複数回答)

	家族・親族がいる	住居がある	収入源がある	医療・介護システムが優れている	コミュニケーションがとりやすい	愛着がある	理由なし	その他	合計
中国	13	4	5	11	5	5	3	1	21
ブラジル	11	7	4	3	2	5	0	1	14
ペルー・ボリビア	7	1	2	3	1	0	1	0	9
フィリピン	2	0	0	0	0	0	0	0	2
その他	3	2	2	3	1	0	0	1	5
合計	36	14	13	20	9	10	4	3	51

表25 表23の理由(住む場所別・複数回答)

	家族・親族がいる	住居がある	収入源がある	医療・介護システムが優れている	コミュニケーションがとりやすい	愛着がある	理由なし	その他	合計
母国	9	2	1	0	3	3	0	0	9
日本	24	12	10	15	6	7	3	2	36
まだ考えていない	3	0	2	5	0	0	1	1	6
合計	36	14	13	20	9	10	4	3	51

表26 今後どのようなことを楽しみたいか(複数回答)

	仕事	ボランティア	家族団らん	趣味・レジャー	一人のんびり	友人と交流	健康づくり	わからない	その他	合計
中国	6	7	8	13	5	8	12	2	2	25
ブラジル	10	4	8	15	2	9	9	0	1	19
ペルー・ボリビア	3	2	8	5	0	3	4	0	0	12
フィリピン	0	2	1	0	0	1	0	0	0	3
その他	1	1	1	3	0	2	4	0	0	5
合計	20	16	26	36	7	23	29	2	3	64

表27 今後の楽しみと今の楽しみとの比較(「今後の楽しみ」－「今の楽しみ」)

	仕事	ボランティア	家族団らん	趣味・レジャー	一人のんびり	友人と交流	健康づくり	わからない	その他	合計
中国	-6	0	-2	3	0	0	3	1	-1	0
ブラジル	0	0	-2	3	-1	2	2	-1	-2	-1
ペルー・ボリビア	-1	0	1	2	-3	-2	2	0	0	0
フィリピン	0	0	-1	0	-1	1	0	0	0	0
その他	-1	1	0	0	-1	1	1	0	-2	0
合計	-8	1	-4	8	-6	2	8	0	-5	-1

表28 老後に向けての準備

	している	していない	考えている	その他	合計
中国	5	5	15	0	25
ブラジル	7	3	9	1	20
ペルー・ボリビア	4	0	8	0	12
フィリピン	1	0	2	0	3
その他	2	1	2	0	5
合計	19	9	36	1	65

表29 ライフプランをつくりたいか

	つくりたい	つくり始めてある	つくってある	つくりたくない	わからない	判断できない	その他	合計
中国	9	4	5	1	3	1	2	25
ブラジル	7	1	2	4	2	4	0	20
ペルー・ボリビア	6	0	0	0	4	2	0	12
フィリピン	0	1	1	0	0	1	0	3
その他	1	2	0	0	1	0	1	5
合計	23	8	8	5	10	8	3	65

表30 日本で老後を迎えるにあたっての心配・不安（複数回答）

	日本語ができない	生活習慣のちがいがい	健康の不安	災害時の不安	経済的不安	介護・看護 ^{※1}	近所づきあい	終末期ケア・看取り ^{※2}	葬儀・埋葬 ^{※3}	墓の確保	その他	特にない	合計
中国	4	3	6	5	9	4	0	4	2	1	1	8	25
ブラジル	2	1	7	4	9	4	2	4	1	1	2	3	20
ペルー・ボリビア	2	0	4	2	5	1	0	1	0	0	1	0	11
フィリピン	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	3
その他	0	2	0	1	0	1	1	0	0	1	1	3	5
合計	9	6	17	12	23	11	3	9	3	3	5	15	64

※1 介護・看護が必要になったときに誰が助けてくれるか
 ※2 終末期ケアや看取りが自分の希望どおりにできるか
 ※3 葬儀や埋葬をどうしたらいいかわからない

(4) 介護保険制度

介護保険制度を「知っているし、内容も理解している」という人は29名と半数近くおり、制度そのものを「知らない」人は7名しかいない。その一方で、制度は知っていても内容について理解していない人も28名いる（「知っているが、内容はあまり理解していない」22名、「知っているが、内容は全くわからない」6名）（表31）。

介護に関する情報の入手先としては、「知人・友人」が最も多く、23名となっている。次いで「役所」が19名、「インターネット」が18名（うち15名が60歳未満）、「家族」が17名となっている（表32）。

介護保険に入っているか聞いたところ、「入っている」と回答した人は、65名中36名であった（表33）。なお、介護保険は40歳以上から加入が義務付けられており、64歳までは健康保険料から一体的に徴収され、65歳以上は原則、年金から天引きされる。したがって、本調査の対象者は50歳以上であることから、全員が介護保険制度の対象のはずである。(2)で示したとおり、健康保険には60名、年金には50名が加入していることから、介護保険の加入者はもっと多くなるはずであるが、加入している意識がない人がいるものと推察される。

回答者自身の要介護・要支援認定の状況については、「要介護」が2名、「要支援」が4名であり、利用

している介護サービスは「通所デイサービス」が2名、「福祉用具貸与」が1名のみであった。したがって、介護サービスの満足度や介護通訳制度の必要性に関する質問には4名しか回答しておらず、あまり参考にならないが、介護サービスに対して満足しているのは半数の2名（「まあまあ満足」含む）、介護通訳制度が必要だと思う人は4名全員（「ときどき必要」含む）となっている（表34、表35、表36、表37）。

回答者の家族の要介護・要支援認定の状況については、「要介護」は6名、「要支援」は1名であり、利用している介護サービスは「訪問介護」が1名、「通所デイサービス」が4名、「福祉用具貸与」が1名であった。介護サービスに対して満足しているのは6名中5名、介護通訳制度が必要だと思う人は5名中2名であった（表38、表39、表40、表41）。回答数が少ないため、推測となってしまいが、家族の場合には、自分が直接介護してもらっているわけではなく、介護してもらって助かっているという意識があるため、サービスに対する満足度は高くなり、一方で、回答者自身が介護通訳をしていれば、その必要性は低くなると思われる。

「要介護（要支援）になったときどうしたいか、あるいは現在どうしているか」と聞いたところ、最も多いのは「何も考えていない」で20名、次いで「在宅で生活したい」が17名、「介護サービスを利用する」

在日外国人の高齢者支援に関する質問紙調査報告

表31 介護保険制度があることを知っているか

	知っているし、内容も理解している	知っているが、内容はあまり理解していない	知っているが、内容は全くわからない	知らない	合計
中国	12	8	2	3	25
ブラジル	7	10	1	2	20
ペルー・ボリビア	5	2	2	2	11
フィリピン	2	0	1	0	3
その他	3	2	0	0	5
合計	29	22	6	7	64

表33 介護保険に入っているか

	入っている	入っていない	わからない	合計
中国	16	9	0	25
ブラジル	11	6	3	20
ペルー・ボリビア	4	5	3	12
フィリピン	2	0	1	3
その他	3	2	0	5
合計	36	22	7	65

表32 介護に関する情報の入手先（複数回答）

	インターネット	知人・友人	家族	病院	地域包括支援センター	役所	国際交流協会	介護施設	町内会・自治会	支援団体	相談窓口	その他	特になし	合計
中国	9	13	9	3	3	6	2	6	1	2	0	1	0	25
ブラジル	7	5	3	0	1	6	2	0	1	0	1	1	2	20
ペルー・ボリビア	2	3	3	0	0	4	1	0	0	0	0	1	1	10
フィリピン	0	2	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	3
その他	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	1	5
合計	18	23	17	4	5	19	5	6	2	3	1	3	4	63

表34 あなたの要介護・要支援認定の状況

	要介護	要支援	認定なし	わからない	合計
中国	1	2	5	13	21
ブラジル	0	0	15	3	18
ペルー・ボリビア	1	1	3	7	12
フィリピン	0	1	0	2	3
その他	0	0	3	1	4
合計	2	4	26	26	58

表35 あなたの利用している介護サービス（複数回答）

	通所デイサービス	福祉用具貸与	利用していない	わからない	合計
中国	2	1	0	0	2
ペルー・ボリビア	0	0	2	0	2
フィリピン	0	0	0	1	1
合計	2	1	2	1	5

表36 あなたの介護サービスの満足度

	満足	まあまあ満足	あまり満足していない	合計
中国	1	1	0	2
ペルー・ボリビア	0	0	2	2
合計	1	1	2	4

表37 あなたの介護通訳制度の必要性

	必要	ときどき必要	合計
中国	0	2	2
ペルー・ボリビア	1	1	2
合計	1	3	4

表38 家族の要介護・要支援認定の状況

	要介護	要支援	認定なし	わからない	合計
中国	5	0	0	10	15
ブラジル	0	0	7	2	9
ペルー・ボリビア	0	1	3	4	8
フィリピン	0	0	0	2	2
その他	1	0	2	0	3
合計	6	1	12	18	37

表39 家族の利用している介護サービス（複数回答）

	訪問介護	通所デイサービス	福祉用具貸与	利用していない	合計
中国	1	2	1	1	3
ペルー・ボリビア	0	1	0	0	1
その他	0	1	0	0	1
合計	1	4	1	1	5

表40 家族の介護サービスの満足度

	満足	まあまあ満足	あまり満足していない	合計
中国	3	0	1	4
ペルー・ボリビア	1	0	0	1
その他	0	1	0	1
合計	4	1	1	6

表41 家族の介護通訳制度の必要性

	必要	ときどき必要	あまり必要ではない	必要ではない	合計
中国	0	1	1	1	3
ペルー・ボリビア	1	0	0	0	1
その他	0	0	0	1	1
合計	1	1	1	2	5

表42 要介護（要支援）になったときどうしたいか。あるいは現在どうしているか（複数回答）

	配偶者の世話になる	子どもの世話になる	介護サービスを利用する	在宅で生活したい	介護施設に入る	何も考えていない	わからない	その他	合計
中国	6	3	8	7	2	7	3	0	25
ブラジル	1	1	5	5	4	9	2	1	20
ペルー・ボリビア	3	1	1	2	0	3	2	0	10
フィリピン	0	0	0	1	1	0	1	0	3
その他	0	1	0	2	0	1	0	1	4
合計	10	6	14	17	7	20	8	2	62

表43 介護サービスを利用する際に不安なこと（複数回答）

	言葉がわからない	文化や習慣、雰囲気になじめない	日本人利用者との関係	スタッフとの関係	食事の味が合うかどうか	利用料を支払えるか	通所等手伝ってくれる人がいるか	利用にあたっての手続の方法	使えるサービスが見つかるかどうか	特にない	合計
中国	9	4	1	1	4	4	1	2	1	12	23
ブラジル	1	2	2	2	1	8	1	3	9	3	19
ペルー・ボリビア	3	1	1	1	1	5	1	4	0	1	10
フィリピン	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	2
その他	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	3
合計	13	9	5	4	7	18	4	9	10	18	57

が10名となっている（表42）。「何も考えていない」に「わからない」を加えると28名となるが、表28や表29において、老後の準備やライフプランに対する関心が高いことと比較すると、自分自身が要介護（要支援）の状態になったときにどうするか考えている人は少ない。そうした状態になることをイメージできていないためではないかと推察する。

また、「在宅で生活したい」という人は17名いるが、そのうち、「配偶者の世話になる」も選択している人が3名、「子どもの世話になる」も選択している人が2名、「介護サービスを利用する」も選択している人が5名となっている。配偶者にも子どもにも世話になる人が1名、介護サービスも子どもの世話にもなる人が1名いることから、実質的に8名は在宅で生活する際に、誰かの助けを借りることを想定しているが、残りの9名に関しては、誰の助けも借りずに在宅で生活しようとしていることになる。

介護サービスを利用する際に不安なことは、「利用料を支払えるか」が最も多く18名となっており、次いで「言葉がわからない」が13名、「使えるサービスが見つかるかどうか」が10名となっている。一方で、「特にない」は18名となっており、無回答の人も不安なことは特にないと解釈すると、何らかの不安がある人は39名にとどまる（回答者65名のうち、当設問に回答があったのは57名、無回答は8名）。また、文化や習慣、食事の味、日本人利用者やスタッフとの関係といった施設内の介護現場での不安もあるが、利用料

が支払えるかとか使えるサービスが見つかるかとか「利用にあたっての手続きの方法」といった介護現場以外の不安が多い（表43）。一般的には、外国人高齢者に対して、文化のちがいを踏まえて、どのように介護サービスを提供していくかが課題だと思われるが、そうしたことに対する不安が少ないのは、実際には、それほど課題ではないということなのか、あるいは、利用料等の介護現場以外の不安の方が大きいのか、それとも、まだ回答者が実際に介護サービスを利用していないからイメージできていないだけなのか。要因はいくつか考えられるが、本調査からだけで分析することは難しい。

以上のことから、多くの人が「介護保険制度」というものがあることを知っているが、内容を理解している人は半数程度しかいない。筆者たちの活動の一つとして、「日系ブラジル人向け介護保険制度説明会」を開催したことがある⁹⁾が、そのアンケート結果においても、介護保険制度について、13名中8名が「聞いたことはあるが、よく知らない」と回答している。また、今後、介護についての勉強会があれば参加したいか聞いたところ、全員が参加したい（「ぜひ参加したい」10名、「機会があれば参加したい」3名）と回答したことから、内容を理解するための機会を設ける必要があると思われる。加えて、自分自身が介護が必要になったときのイメージがあまりない人も多いように思われるため、介護が必要になったときの模擬体験や介護施設見学等によって、将来、介護サービスを受け

ることになった場合の備えをしていく必要もあるだろう。

(5) 介護や終末期ケア、葬儀などに対する望み

介護に対する望みとしては、「母語ができるスタッフに介護サービスを提供してほしい」が最も多く21名、次いで「介護に関する情報や手続きの多言語化をしてほしい」が19名、「母国の文化や雰囲気、食事・娯楽などがあるところで介護してほしい」が15名となっている。一方で、「特にない」は20名となっており、無回答も特に望みはないと解釈すると、介護に対して何らかの望みのある人は65名中40名となる（表44）。

終末期ケアや看取りに対する望みは、「家族の望むようにしてほしい」が最も多く19名、次いで「最期のときに信仰や宗教を尊重してほしい」が14名、「延命措置などについて自分の望むかたちで治療してほしい」が11名（うち9名が60歳未満）となっている。

一方で、「特にない」は16名となっており、「わからない」や無回答も特に望みはないと解釈すると、終末期ケアや看取りに対して何らかの望みのある人は38名となる（表45）。

葬儀に対する望みは、「家族の望むようにしてほしい」が最も多く17名、次いで「自分の信仰や宗教に従ってほしい」が11名となっている。一方で、「特にない」は24名となっており、「わからない」や無回答も特に望みはないと解釈すると、葬儀に対して何らかの望みのある人は31名となる（表46）。

最後に、日本での老後に対する意見や要望を自由記述で聞いたところ、仕事ができなくなって収入が得られなくなることに対する経済的不安や介護施設には言葉が通じるスタッフがいるといいといった意見はあったが、記入があったのは5名だけであり、具体的な意見や要望は書かれていなかった（表47）。

表44 日本での介護に対する望み（複数回答）

	母語ができるスタッフに介護サービスを提供してほしい	母国の文化や雰囲気、食事・娯楽などがあるところで介護してほしい	介護に関する情報や手続きの多言語化をしてほしい	同じ国同士の人ができる施設がほしい	その他	特にない	合計
中国	12	11	5	6	0	8	24
ブラジル	3	2	7	2	2	9	20
ペルー・ボリビア	5	1	5	0	1	1	10
フィリピン	1	1	0	0	0	0	2
その他	0	0	2	0	0	2	4
合計	21	15	19	8	3	20	60

表45 日本での終末期ケア・看取りに対する望み（複数回答）

	延命措置などについて自分の望むかたちで治療してほしい	最期のときに信仰や宗教を尊重してほしい	自宅で看取ってほしい	家族の望むようにしてほしい	その他	特にない	わからない	合計
中国	4	4	4	4	0	10	3	24
ブラジル	2	4	4	12	1	3	2	20
ペルー・ボリビア	4	2	0	3	0	1	2	10
フィリピン	1	0	0	0	0	1	0	2
その他	0	4	0	0	0	1	0	5
合計	11	14	8	19	1	16	7	61

表46 日本での葬儀に対する望み（複数回答）

	自分の信仰や宗教に従ってほしい	日本のしきたりや構わない	家族の望むようにしてほしい	その他	特にない	わからない	合計
中国	1	1	5	3	12	2	24
ブラジル	4	0	8	0	8	3	20
ペルー・ボリビア	2	1	4	0	3	1	10
フィリピン	1	0	0	0	1	0	2
その他	3	1	0	1	0	0	5
合計	11	3	17	4	24	6	61

表47 その他、日本での老後に対するご意見やご要望

中国 1	①中国の定年は女性50歳、男性55歳となっている。日本の定年は現在65歳である。今後定年が75歳になると定年前に日常生活において自立はできるが、仕事をするのが困難な場合は収入が得られなくなる。このような無収入、介護認定がない状況において高齢者は社会生活していく中でどうすればよいのか。 ②グローバル化社会が進行していく中、今外国人がますます増え、言葉と文化も大きな問題となる。言葉がわからないことは、日常生活においても大きな不安を伴うと考えられる。外国人の利用者が入る施設等において、その方が少し安心して過ごせるように、言葉が通じるスタッフがいるといいのではないかと考えた。
ブラジル 1	私は通訳・相談員として住んでいるところの市役所で働いていました。外国人コミュニティの支援を続けたかったが、市役所としてはもう通訳と翻訳者のみの人材よりも、翻訳機やタブレットを使っていく方向性を取りました。そうして、これからは通訳が話せる言語のお客さんを対応するだけでなく、他の国籍の外国人や日本人のお客さんも対応できる人材に変えています。私は日本語を書くのが苦手なため、この仕事を辞めることにしました。ただし、これからも外国人コミュニティを支えていける仕事をまたしたいですが、日本人のお客さんも対応しないといけないのはとても厳しい条件だと思います。
ブラジル 2	老後について考えたことはありませんが、今後年齢を重ねるにつれ、準備する必要があると感じています。
ブラジル 3	丁寧な対応をしてほしいです。
ブラジル 4	このアンケート調査を実施してくれたチームに感謝しています。日本に住むすべての外国人が将来は安心した生活をできるために、この調査にたくさんの方が参加してくれることを望んでいます。 私は日本が大好きですが、心配はこの調査の内容と同じです。一人で住んでいるため、“人生の最後”は穏やかに過ごしたいと思います。 高齢者になって、サービスが必要であれば、介護サービスや他に使える支援を利用したいです。できれば無料でサービスを受けたいです。
ブラジル 5	必要になった時には、丁寧な対応をしてほしいです。 PS：治安の面についてはここ（日本）に住むのはとてもいいと思う。ただし……高齢になったら難しいと思う。年金は少ないし、物価は高すぎる。
フィリピン 1	引退する頃には、心身ともに健康でいたい。

以上のことから、研究を始めるにあたり、老後のことを考えた場合、特に、介護や終末期ケア・看取り、葬儀に対して多くの望みがあるのではないかと仮説を立て、質問項目に入れたが、現時点では、それほど望みはないことがわかった。これは、回答者の属性として、健康で孤立していない人が多いことと連動している可能性がある。また、今回は、アンケートによる調査であったが、時間をかけてヒアリング調査をした場合には、ちがう結果になることも予想される。

5. まとめと今後の研究の方向性

今回の調査においては、50歳代以上の在日外国人の実態の一部を垣間見ることができた。その実態は、おおむね、同年代の日本人と同じなのではないだろうか。現在は、家庭もあり、仕事もあり、社会との接点も持っており、老後は家族に囲まれながら、趣味や健康づくりをしながら、のんびりと過ごしたい。そのためには、日本の医療・介護システムに期待するところは大きいですが、経済的な面で一抹の不安を覚えている。老後への備えをしておかなければと思いながらも、具

体的なイメージはあまりなく、介護保険制度もあまりよくわかっていない。そんな像を描くことができる。

こうしたことから、外国人高齢者の問題を考えるにあたっては、日本人／外国人の区別なく、高齢者全般として考えていく視点が必要となってくる。しかし、本調査は、日本人高齢者に関する研究を踏まえて行ったものではない。今後は、今回の調査で得られた結果をベースに、日本人高齢者の場合と比較しながら、研究を進めていく必要があるだろう。

そのうえで、やはり、外国人高齢者独自の課題もあるだろう。言葉や文化の面はもちろん、日本人よりも日本社会のシステムになじみがないことに起因する躓きもあるかも知れない。ただ、それが何なのかは、本調査からは、あまり見えてこなかった。まだ実際に介護される体験をしたことがない外国人に対して、質問をしても見えてこないものがある。今後は、具体的なライフプランに沿って、具体的に課題を抽出していく必要があるだろう。

支援の方向性としては、在宅で楽しみながら生活したいという人が多いことから、介護面でのサポート

も重要であるが、生きがいを見出せるようなサポートも必要となってくるのではないだろうか。そうした具体的な要望についても、今後、ヒアリング調査等によって明らかにしていきたい。

なお、今回の調査は、外国人コミュニティ団体を經由して行ったものであるため、コミュニティに入っていない人は対象に含まれていない。コミュニティに入っている人と入っていない人では、情報収集や制度利用の面でちがいがある可能性はあるが、今回の調査からは、そのちがいを明らかにすることはできず、本調査の限界と言える。

また、本調査においては、年齢別に集計した結果、60歳未満と60歳以上で特徴的だった項目をいくつか記載した。しかし、表20の「老いを感じること」の分析で示したように、多くの質問項目については、年齢による傾向を見出すことはできなかった。その理由としては、外国人の場合、年齢に応じて、社会的地位や生活が向上していくといった線形的なライフスタイルとは異なっている場合が多いといったことが考えられる。しかし、これは、あくまでも推測であり、本調査結果からは、そこまでの分析を行うことはできない。したがって、今後、ヒアリング調査等によって、ライフストーリーとして、年齢に応じた変化はあったのかどうか、また、滞在年数が増えるにつれて、どのような変化があったかについても明らかにしていきたい。

付記

本研究は、科学研究費（2021・2022年度 日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究(B) 課題番号21H00821 山本理絵研究代表）の助成による。

調査に協力していただいた皆様、研究に協力していただいた生涯発達研究所の皆様へ感謝します。

注

*1 愛知県立大学客員共同研究員 *2 愛知県立大学非常勤講師 *3 愛知県立大学大学院人間発達学研究所博士後期課程 *4 愛知県立大学教育福祉学部教授

1) 2014年度に筆者ら（木下・大橋）によって「外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト」が始まり、活動の成果として、愛知県では、「あいち多文化共生推進プラン2022」に外国人の高齢化に対する施策が取り入れられ、名古屋市でも外国人高齢者の実態調査の実施がプランに盛り込まれた。また、出入国管理庁の「外国人との共生社会の実現に向けたロードマップ」でも、高齢期を

中心とした外国人に対する支援が盛り込まれた。犬山市では外国人高齢者の介護を想定した支援交流事業、三重国際交流財団では介護通訳育成講座、中日福祉文化協会による岐阜県内の外国人高齢者実態調査、多文化高齢社会ネットワークかながわの設立等、各地で関心が持たれるようになり、マスコミにおいても、外国人の高齢化問題について、多く取り上げるようになった。さらには、愛知県立大学生涯発達研究所で異文化終活セミナーが開催されたり、日本移民学会第32回年次大会の大会企画シンポジウムテーマとして、「異邦に生きる移民の高齢化と甲い」が取り上げられる等、研究対象としても注目を集め始めている。

- 2) 愛知県（2021）によれば、在日コリアン高齢者に対して、社会福祉法人青丘社が1988年6月から、NPO法人神戸定住外国人支援センターは1997年2月から、NPO法人京都コリアン生活センターエルファは2001年1月から、NPO法人コリアンネットあいちが2003年2月から支援している。
- 3) 「4. 調査結果」に示したように、日本生まれの中国系やブラジル系の人も含まれている。
- 4) 在留資格には、就労できる内容が限られている「教授」「経営・管理」等の就労系、所定の手続きをしなければ働けない「留学」「家族滞在」等の非就労系、就労に制限がない「永住者」「定住者」等の身分系のものがある。
- 5) 加入率としては、健康保険が92%、年金が81%となる。愛知県（2022）における外国人の保険や年金の加入状況は、健康保険は87%、年金は77%となっており、本調査と同様の結果となっている。
- 6) 2020年8月9日に愛知県小牧市総合福祉センターで開催。20名の参加があった。

参考文献

- 愛知県（2021）「愛知県外国人高齢者支援事業 外国人高齢者に関する実態調査報告書——ともに老い、ともに幸せな老後を暮らすために」
- 愛知県（2022）「令和3年度愛知県外国人県民アンケート調査結果報告書」
- アルベルト松本（2021）「日本在住の日系人も老後の時期にきたのか」ディスカバー・ニッケイ <http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2021/11/15/nikkei-latino/>（2022-8-16）
- 王榮（2019）「異文化“介護通訳”言葉と文化のコミュニケーター——外国人高齢者と介護の橋渡し役」『共生の文化研究』No. 13
- 王榮・渋谷努（2018）「中国帰国者の介護問題から見た在住外国人高齢者への介護支援の現状と課題——異文化介護の現場から」『社会科学研究』第38巻第2号 中京大

学社会科学研究所

- 大橋充人 (2021) 『在日ムスリムの声を聴く——本当に必要な配慮とは何か』 晃洋書房
- 何彬 (2010) 「在日老華僑・華人の老後——横浜中華街を事例に」 『首都大学人文学報』 No. 423
- 金春男 (2004) 「在日コリアン痴呆性高齢者への施設における介護支援に関する研究——『ケアワーカー』フォーカス・グループインタビューを通じて」 『社会問題研究』 54-1 大阪府立大学社会福祉学部
- 庄谷怜子・中山徹 (1997) 『高齢在日韓国人・朝鮮人——大阪における「在日」の生活構造と高齢福祉の課題』 お茶の水書房
- 鐘家新 (2007) 「在日華僑華人と異国の老後」 『アジア文化研究』 第14号
- 鐘家新 (2017) 『在日華僑華人の現代社会学 越境者たちのライフヒストリー』 ミネルヴァ書房
- 鈴木雅夫 (2008) 「ブラジルからの報告 出稼ぎ問題を考える 表面化してきた出稼ぎ者の高齢化問題」 ニッケイ新聞 2008年1月1日
- 高畑幸 (2020) 「在日フィリピン人の高齢化——再編される共同体と相互扶助」 『社会再構築の挑戦』 ミネルヴァ

書房

- 名和田澄子 (2015) 「高齢化した中国帰国者に対する介護支援」 東海・北陸中国帰国者支援交流センターポランティア研修会講演資料
- ハ・ティ・タン・ガ (2005) 「在日ベトナム人高齢者の居場所」 『在日マイノリティ高齢者の生活権』 新幹社
- 林隆春 (2014) 「日本に住む日系ブラジル人が抱える就労・高齢化・精神疾患問題」 『ブラジル特報』 2014年3月号
- 寶田玲子・柿木志津江・木村志保 (2015) 「滞日外国人の定住化と障害福祉政策への取材課題——日系ブラジル人の現状から」 『総合福祉科学研究』 第6号
- 松本美智代 (2016) 「在沖外国人の介護サービス利用の実態と異文化間介護をめぐる課題」 名桜大学大学院看護学研究科修士論文 (未公刊)
- 牧田幸文 (2020) 「多文化の背景をもつ住民の高齢化と支援」 『都市経営』 No. 13
- 李善姫 (2015) 「外国人花嫁として生きるということ——再生産労働と仲介型国際結婚」 『移民政策研究』 第7号
- 李錦純・西内陽子・高橋芙紗子 (2017) 「看護・介護職がとらえる在日コリアン高齢者支援における特徴と困難感」 『UH CNAS, RINCPC Bulletin』 Vol. 24